

家を出てのんびりと散策していた僕は、学校のあたりをぶらついていたら、グラウンドで知った顔を見つけた。

「やあ。休日だってのに、相変わらず精が出るね？」

陸上用のセパレート型のユニフォームを着て、これから一人で練習を始めようとしていたその少女に、そう声をかける。

「お、なんだ。蓮斗かあ。お前こそ、平日でもいつでもぶらぶらしてないで、少しは運動でもしたらどうなのさ？」

振り返って、呆れ顔でそう答えた彼女の名は、柏木凜生。

僕と彼女とは、いわゆる幼馴染みというやつだ。

思春期に入って以降はさほど親しくもなくなったが、今でも不仲というわけではない。

ショートカットの髪に、その名の通りボーイッシュというよりもむしろ凛々しいという言葉が似合うような長身と、きりっとした顔立ち。

ユニフォームの間隙から覗く、日に焼けてよく引き締まったその体はとても健康的、かつ魅力的だった。

「昔は、一緒によく走り回ったりしてたじゃないか。お前も、陸上でもやれっ
て」

朗らかに笑ってそう言う凜生に、僕は苦笑した。

「いや、ちょっと。これでも最近は、色々忙しくてね」

たとえば、優華を抱いたりとか。

「ははっ、嘘ばかり。まあいいよ、そんなことは。それより、散歩の途中かい？それとも、あたしの練習を見に来たとか？」

「ああ、うん。それなんだけど……」

僕はそう言いながら精神を集中させて、『存在の根源の世界』へ入っていった。



気がつくのと、目の前にはひとつの扉があった。

この向こうにあいつの、柏木凜生という存在のすべての情報が収められた部屋があるのだ。

「邪魔するよ」

そう言いながら扉を開けて中に入り、周囲を見渡す。

思ったよりも女の子らしい部屋だ。

あちこちにかけてられたボードや開かれた本なんかは、彼女の存在を定義する情報がたくさん書き連ねられている。

「よし」

僕はその中から最も基本的な情報が書かれた、重要そうなボードを選び出して、彼女の存在に新しい定義を付け加えていく。

「柏木理央は、獅童蓮斗の幼馴染みであり、彼のことを他の誰よりも信頼している」

「柏木理央は、獅童蓮斗に絶対の信頼を置いているため、彼の言うことは何でも信じ、どんな質問にも快く答え、如何なる要求にでも疑うことなく従う」

「柏木理央は、獅童蓮斗以外の男に対しては異性としての興味を一切持たず、交際もしない」

「ひとまず、こんなもんでいいかな？」

僕は自分の書き込んだ内容をチェックして、ひとつ頷くと、この成果を確認するために物質の世界へ戻っていった。



「おいおい、何で急に黙るんだよ。それなんだけど、なにさ？」

目を開けると、腰に手を当ててこちらの顔を覗き込み、怪訝そうにしている理央がいた。

時間はほとんど経過していない。

「……ああ、いや。ちょっとだけ、理央に確認しておきたいことがあってね」

「なんだよ、あらたまって」

首を傾げてキョトンとする理央に、僕は質問した。

「ねえ理央。君は僕の頼みなら、何だって聞いてくれるよね？」

すると、彼女は当然といった様子でこう言った。

「当たり前だろ。あたしはお前のことを信じてるんだから」

「じゃあ、もし仮に僕が、君にこの場で服を脱いで、裸を見せてくれと言ったら？」

これまでの理央にこんなことを言おうものなら、冗談だと思われて笑い飛ばされるか、怒られて殴られるかだろう。

痴女じゃあるまいし、誰に見られるかもわからない屋外のグラウンドでそんなことをしろと言われて承諾する奴なんて、普通はいるわけがない。

だが、今の彼女なら違うはずだ。

「ん、別に構わないけど」

予想通り、あっさりとした口調でそう答える理央。

「それで、本当に見せてほしいのかい？」

僕はにっこりと笑って頷いた。

「だけど、さすがにここじゃまずいかな。部室に行こうよ、理央の他には誰もいないんだろ？」

「ああ、そうだね」

理央は僕の言葉に、何の疑問も抱かずにそう言って頷いた。

彼女と共に陸上部の部室に入ると、鍵をかけてカーテンを引き、窓も閉めて密室の空間を作った。

「さて、これで邪魔は入らないな。それじゃあ、さっそく頼むよ」

「はいよ」

理央は何の躊躇もなく、陸上用のセパレート型ユニフォームをひょいひょいと脱ぎ捨てて、下着だけの格好になった。

「どうだい、蓮斗。あたしの体、ちゃんと綺麗だろ？」

そう言って、胸を張る理央。

僕はその体を舐めるように見つめてから、口を開いた。

「うん、すごくきれいだよ。日頃のトレーニングの成果がよく出てる。お腹も、背中も、脚も、腕も、足も、どこもかしこも健康的で素晴らしいね。肌の色艶もよくて、まるで芸術品みたいだ」

「おいおい、蓮斗は口が上手いなあ。まあ、毎日しっかり手入れして鍛えてるからね！」

理央は苦笑しながらも、まんざらでもなさそうに、胸元に手を当てながらそう言った。

「本当にきれいだよ。ぜんぶ見たいから、下着も脱いでくれる？」

「はいよ、わかったよ」